

馬術の歴史と競技について

馬術部 岡本正義（昭和 49 年卒）

1. 馬術とは

優雅で気高いスポーツの象徴として愛されている馬術には、長い歴史と伝統があります。馬術があらゆるスポーツと比べて性質を異にする点は、生命のある馬と共に運動をするところだと思います。これは馬術だけの最大の特徴といえるでしょう。

人間の数倍もの大きい馬を、人の意のままに動かすことは馬術の最大の難しさでもあり、半面それが他のスポーツでは味わえない奥深い魅力でもあります。乗馬技術が進めば進むほど、馬も複雑な動きをしてくれます。人と馬との信頼関係が深まっていく喜びは馬術ならではの醍醐味であり、さらにそれが人馬の技術向上につながっていきます。

馬術の歴史はヨーロッパに端を発するブリティッシュ馬術と、新大陸におけるカウボーイ乗馬を起源とするウエスタン馬術の二つが主流をなしています。日本では戦後、学生馬術が牽引し、また民間の乗馬熱の高まりもあり、乗馬人口は増加しています。

2. 馬についての知識

馬術は、馬の本能や特性を最大限に引き出すことによって成り立っています。馬という動物を正しく理解する努力を省略したり、基本的な正しい取り扱いを軽視したりすると馬との密接なコミュニケーションが取れなくなり、馬術の上達も望めなくなります。

食用として狩猟の対象から家畜化が始まり、馬の速く走る能力や持久力に着目され、輸送・移動の手段として利用されてきました。また農耕作業や軍事用などに改良され、人類とともに生きてきました。馬は極めて平和な家族的な気質ですので、他の家畜よりも有用に人を支えてきました。馬は一般に想像されているよりも、はるかに感覚の鋭い動物です。とりわけ聴覚は群を抜いています。ですから、馬に接するときの配慮が必要になり、馬術競技においての大きな声援やフラッシュ撮影などはタブーとされています。

馬体は頭、首、胴、四肢、尾からなり、それぞれに無駄なく均整のとれたもので、人が乗って運動するのに適した動物です。成馬は一般に体重が 400～500kg あり、60～70kg の装具と人間を乗せても、馬本来の運動能力をそこなうことはありません。馬の視界は約 350 度あるといわれ、真後ろ以外はほとんど視界に入ります。聴覚と臭覚は敏感で、耳はあらゆる方向に動きます。

馬にはそれぞれに体の特徴があり現在では種類、性別、毛色、額にある白い模様（白斑）の形や大きさなどで識別されています。

馬が普通に生活していくためには、人間の世話が必要です。エサを与え、馬屋を掃除して、馬体の手入れをしなくてはなりません。毎日世話をすることで、馬に対しての愛情もわいてきますし、馬の体調や気分が理解できるようになります。特に蹄は大切なもので、手入れは重要な日課になります。

馬の歩き方は 4 種類に区分されます。「常歩（なみあし）」と呼ばれる歩様は、4 本の足

が交互に着地する4拍子です。「速歩（はやあし）」と呼ばれる歩様は、2拍子になり人が歩くように対角線上の足が交互に動きます。「駆歩（かけあし）」と呼ばれる歩様は、スピードのある3拍子です。左右どちらの前足が先に出てリードしているかで「左駆歩（ひだりかけあし）」「右駆歩（みぎかけあし）」区別されます。普通、速さは分速約340mです。最後が「襲歩（しゅうほ）」と呼ばれる歩様になります。競馬でよく見る走り方で、馬は全速力で走っている状態で4拍子になります。分速約1000mです。人間の最速ランナーの100mを10秒の記録と比較しても馬の速さを理解できると思います。

このエネルギー源は麦やふすまなどの農耕飼料で与えます。現在は管理されている馬には乾燥した草や人工的に栄養素を調合したペレット状の飼料を与えています。水の補給も大事なことで一日に25～30ℓの水を飲む馬には常に新鮮な水を補給しなければなりません。馬屋には以前は寝ワラとよばれるワラを敷き詰めていましたが（人の布団のように）、現在は木のおがくずを使用しています。蹄には蹄鉄をクギで打ちとめていますので、蹄は破損することはないのですが、蹄鉄の打ち変えと蹄を削ることをします。装蹄師と呼ばれる専門家によって装蹄・削蹄をします。

馬はその使用用途に応じるために長年かけて改良されてきました。同時に騎馬術も大きく発達していきました。ドイツ、フランス、イギリスなどは現在も馬術の盛んな国として有名で、乗用馬の生産も盛んにおこなわれています。

現在、最も身近にいるサラブレッドという馬は、人間が何世紀にもわたって創り出した傑作です。十八世紀ごろにイギリスで種として固定され、世界に広まっていきました。馬の習性であるスピードによってのみ淘汰され続けられました。このため血統が非常に重んじられ現在の競走馬の血統をさかのぼればすべて、3頭の馬にたどり着くことができます。

ヨーロッパの先祖は狩猟民族ないし騎馬民族で、先祖代々馬と生活をともにしてきた民族です。それにキリスト教の影響も大きく加わり、動物愛に徹底した精神が受け継がれています。アメリカにしても、大平原を西に開拓したフロンティア精神が、馬とともに暮らした生活の中で育ち、馬が唯一の交通機関でつねに馬と共存共栄して今日にいたっています。

3. 馬術競技について

馬術競技は、他のスポーツと異なり、生き物である馬と人が一体となって競技を行うスポーツです。騎手が馬の能力を最大限に引き出し、馬も選手の要求に精一杯こたえようとする関係が結ばれたときに「人馬一体」の妙技が繰り広げられることになります。

騎手は馬を愛し、馬を理解し、自分の馬がいつでも自分の指示に喜んで従い、どんな難しい運動でもできるように教え込んでおかなければなりません。このように馬の能力を高めるための訓練を「調教」といいます。

競技のルールブックの初めのページには「馬のウェルフェアのためのFEI（国際馬術連盟）馬スポーツ憲章」が掲げられ、馬の安全を最優先することが明記されています。

準備運動場や厩舎での馬への虐待行為は細かいところまで禁止され、鞭の長さや馬体の傷などもチェックされ、正しい歩様の確認や薬物検査もされる競技会もあります。

馬術競技では伝統と格式を重んじるため、選手は正装で参加することを規定で決められ、また安全向上のために3点式ヘルメットの着用を義務付けられています。馬装についても細かく規定され、出場前後に審判のチェックがあります。馬術の競技会は男女の区別がないことも特徴の一つです。

(1) 馬場馬術競技

長方形(20m × 60m)の馬場内で三種の歩様(常歩、速歩、駆歩)で躍動感に満ちた様々な運動を演じるものです。前進・停止・後退あるいは直進・斜め・円形・波形に演じて馬の調教レベル、騎手の技量を競い合います。

経路図に決められた運動課目を順序どおりに演技して、規定どおりの図形を正しく流れるように指定された場所に描き、しかも優美さが感じられるように行われているかを、審判が0から10点で各項目の採点を行います。運動課目は馬・選手のレベルに応じたものがあり、また年齢・性別に分けた競技会もあり、騎手のレベルに合った競技会に参加できます。

馬場馬術競技の中に自由演技という課目があります。フィギュアスケートのように音楽とともに演技をし、採点される課目です。演技方法の構成や音楽の選曲を各自で考えて規定時間内で演技をするものです。審判の採点は①技術点(必須科目を必ず行う)と②芸術性評価点(芸術的印象、音楽的印象、演出構成など)の合計となります。

(2) 障害馬術競技

馬場内に設置された障害物を、過失せず指定されたコース通りに飛越する競技です。障害物を構成する横木の落下や障害前での拒止などの過失があると減点となります。走行の際に拒止が2回となると失権となりコース走行を途中で止めなければなりません。障害物は、競技会ごとに趣向を凝らして作られ配置されますから、馬がどんな形や色にも驚かず飛び越えるように調教されていなければなりません。競技で1位が決まらない場合は、規定によりジャンプオフ(決勝競技)を実施することがあります。人馬の調教レベルに合わせて、コースの難度・障害の高さ・幅を変えた経路が作られます。

(3) 総合馬術競技

馬術競技の要素をほぼすべて盛り込んだ複合競技です。馬場馬術・クロスカントリー・障害飛越の3種目を1～3日で同じ人馬で行い、それぞれの減点合計で争います。中でもクロスカントリー競技は騎乗能力とホースマンシップが試される最もスリルある、意欲のかきたてられる競技で、飛越能力、調和、人馬間の信頼を示し、変わりやすい様々な競技条件に適応できる人馬の能力に主眼が置かれています。

(4) その他の馬の競技として

- ★エンデュランス 40km から 160km の野外走行でタイムを競う
- ★レイニング(ウエスタン) 急停止や回転のタイムを競う

★馬車競技

4頭だての馬車で経路走行のタイムを競う

★軽乗

回転する馬の上でのアクロバティックな運動で採点される

4. 学生馬術について

全国で80以上の大学馬術部が上記の3種目を練習し、各地区予選会を行い全国大会に臨んでいます。人的、経済的な問題はあるものの学生自身が馬を保有し、管理・育成しながら活動し、また人格形成も行っています。物言わない馬がパートナーですので苦勞も多いのですが、達成感も馬と共に味わえますし、学生同士の思いやりや気遣いなどが大きく人を育てています。それぞれのレベルに合った競技会もあり、また担当した馬の成長とともに人も心身ともに成長するという好循環が見られます。唯一生命のある馬とともに競技を目指し、また良い結果を得られた時は、人馬ともに最高の喜びを感じることができます。馬との関わり合いが少ない日本では大学馬術部は、馬との出会いができる身近な場としてまた馬術競技を始めるきっかけとしての存在は大きいものがあります。関学馬術部は90年以上の歴史と伝統を持ち、人と馬との良好な関係を創部以来粘り強く続けています。「馬という生き物と共同生活をし、愛馬精神を育てるとともに自己修養を行い、学生馬術の発展に努力する」という目的に向かって馬術部は日々活動に邁進しています。

5. 最後に

馬との出会いがその人の感動を呼び、また物言わない馬への限りない愛情を覚えると、人は大きく成長します。心配り、心配りができなければ馬に受け入れてもらえないばかりか、思い通りの指示が伝わらなくなります。人間関係も同様に、コミュニケーション力の向上こそが人と人との関係を高めることになります。他の人への言葉や態度が人間関係に大きく関わることを、馬を通じて感じることができます。新たな人と馬との関係として、ホースセラピー馬として調教された馬を使い、心身の障害や心の病を癒す動物介在療法が見直されています。またパラリンピックの馬術競技には障害者の方が元気に参加されています。馬と人との関係がより新しくなりつつあります。



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供『関学スポーツ』)